

10月の星空

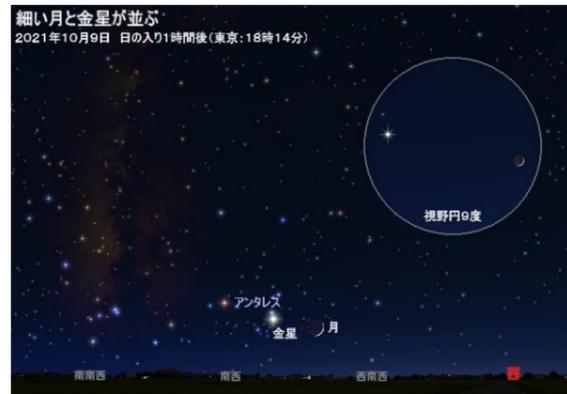
夏の三角が西の空へ移り、秋の四辺形が天頂近くまで高く上ると、星空にも本格的な秋が訪れたことを感じる。秋の夜空には1等星こそ少ないが2等星は案外多く、思った以上に星々を見つけやすい。ペガスス座、アンドロメダ座、カシオペア座などは形もわかりやすいので、ぜひ探してみよう。さらに、木星と土星を目印にすれば、やぎ座の位置もわかる。天体望遠鏡で惑星観察や撮影をする合間に、星座探しも楽しみたい。

肉眼や双眼鏡では月と惑星の共演が見ものだ。14日に月と土星、翌15日に月と木星が、それぞれ接近する。前後の日も観察して、月の移動や満ちていく様子も確かめよう。また、9日と10日は細い月と金星が並ぶ。やや間隔は開いているものの、秋の夕暮れを彩る見逃せない光景となるだろう。金星は30日に東方最大離角を迎える。このころには日中に青空の中でも見えるかもしれない。太陽に注意しながら「星空ナビ」などのアプリも活用して見つけてみよう。

2021年10月9日 細い月と金星が並ぶ

10月9日の夕方から宵、南西の低空で月齢3の細い月と金星が並んで見える。

地球照を伴った幻想的な細い月と金星の共演は、数ある月と惑星の接近の中でも随一の美しさだ。肉眼や双眼鏡で眺めたり、写真に収めたりしてみよう。月と金星の左のほうにはさそり座の1等星アンタレスも見え、金星とアンタレスは16日ごろに大接近する。月と金星の次回の共演は11月8日で、日中に月が金星を隠す金星食が起こる。



2021年10月14日 月と土星が接近

10月14日の夕方から深夜、月齢8の上弦過ぎの半月と土星が接近して見える。

肉眼や双眼鏡で接近する様子を眺めたり、天体望遠鏡で環を観察したりしてみよう。月と土星の左、やや離れたところには木星も見え、翌日15日に月と木星が接近する。月と土星の次回の接近は11月10日。



2021年10月15日 月と木星が接近

10月15日の夕方から16日の未明、月齢9の上弦過ぎの月と木星が接近して見える。

肉眼や双眼鏡で接近する様子を眺めたり、天体望遠鏡で縞模様やガリレオ衛星を観察したりしてみよう。月と木星の右、やや離れたところには土星も見えているので、こちらも楽しみたい。月と木星の次回の接近は11月11日。



10月21日、オリオン座流星群の活動が極大となる。予測極大時刻は21時ごろで、21日の深夜から22日の明け方にかけてが一番の見ごろとなる。

満月過ぎの月明かりの影響がほぼ一晩中あるため、条件は良くない。活動の規模も低調とみられるので、見晴らしが良いところでも1時間あたり数個程度だろう。1つでも流れればラッキー、くらいの気持ちで、月から離れた方向を中心に眺めてみよう。ピークがなだらかな流星群なので数日間は注目してみたい。防寒の準備は万全に。

母天体は5月のみずがめ座η流星群と同じくハレー彗星で、ハレー彗星の軌道は年に2回地球の軌道と近づいていることになる。そのハレー彗星の通り道を毎年この時期に地球が通過することで、そこに残されていた塵が地球の大気に飛び込み、上空100km前後で発光して見えるのが流星群の流れ星だ。



2021年の木星は8月~12月ごろに観察シーズンを迎えます。マイナス2等級ととても明るいのでよく目立ち、街中でも簡単に見つけられます。土星と並んでいる光景が目を引きまします。

木星を双眼鏡で観察すると、木星の周りを巡る4つのガリレオ衛星が見えます。日々並び方が変化する様子は見ものです。天体望遠鏡を使うと木星表面の縞模様や大赤斑も観察でき、さらに面白くなります。

木星を見つけよう

「夜半の明星」とも呼ばれる木星は、とても明るく光る惑星です。建物などに遮られなければ、街明かりがあるようなところでも簡単に見つかります。

2021年の木星は8月中旬まで「みずがめ座」にあり、8月中旬から12月中旬まで「やぎ座」、その後再び「みずがめ座」に移ります。初秋から冬が見ごろです。また、秋には土星も見ごろです。間隔はやや開いていますが、明るい2惑星が並んでいる光景が楽しめるでしょう。



ガリレオ衛星

木星には70個以上の衛星が見つかっています。そのうちイオ、エウロパ、ガニメデ、カリストは大型の衛星で、双眼鏡や小型望遠鏡でも存在がわかります。1610年にガリレオが発見したことから、この4つはとくにガリレオ衛星とも呼ばれています。

ガリレオ衛星のうち、一番木星に近いイオはわずか2日弱で木星の周りを一回りします。一番外側のカリストも一回りするには約17日ほどしかかかりません。このため、ガリレオ衛星の位置は目まぐるしく変化します。木星の裏に回ったり木星の影に入ったりして、見えなくなっていることもあります。